

尾道市の観光バリアフリー事情 車いす生活者の視点からの検証を軸として

森 正*・後藤恵之輔*

Assessment of the Current Status of Barrier-Freeness for the Tourists Visiting Onomichi City from the Viewpoint of Wheel Chair User

by

Tadashi MORI* and Keinosuke GOTOH*

Recently, tourist spots in the whole country are taking measures to incorporate barrier-freeness in order to reduce fall in the number of visitors. This is also to invite aged and disabled persons having lower importance as customers so far. But this initiative would be welcomed by the aged and disabled persons. Accordingly, this study aimed at assessing the status of barrier-freeness on these tourist spots by taking Onomichi City as a case, which is also a slope city like Nagasaki. The findings of the investigation revealed that, in the tourist spots of Onomichi City there are problems such as: separate route for aged and disabled persons, lack of restroom facilities etc. This paper concluded with the suggestions to make the tourist spots barrier-free from the viewpoint of wheel-chair user.

Key words: unified display, public transportation authority, rest room, accessibility, hospitality

1. はじめに

長崎市は世界的に知名度の高い観光地であるが、同時に日本でも指折りの斜面都市でもある。斜面を覆うように家々と樹木の緑が混在し、街並みを形成しているさまは圧巻である。特に、夜間は家々の灯りが電飾となり、見事な景観を演出してくれる。このように、すべての斜面を隈なく利用することで一つの都市が完成し、生活空間として展開しているため、観光客はそのダイナミズムに魅了される。また、非日常的なエキゾチシズムと、市民の日常生活が混然と一体化しているたたずまいに旅情をかきたてられる。それが観光地としての長崎市の魅力である、とも言えるであろう。

しかし、斜面は、景観の魅力という光の部分と、バリアという影の部分の併せ持つ。高齢、もしくは下肢

に障害を持つ観光客が、斜面に点在する観光スポットを巡回して観光の醍醐味を味わおうとすれば、大きなリスクを覚悟する必要がある。車いす使用者や、高齢者では、その楽しみを断念せざるをえない人も多い。

そのような斜面観光都市において、高齢者・身体障害者に配慮した設備や、身体的な負担を軽減するための対策が講じられていれば、これらの人々も斜面都市の景観を堪能しつつ、観光スポットを巡回して、旅情を十分に味わうことができるのではないだろうか。本研究は、そのような配慮・対策に関しての提言を試みようとするものである。

2. 研究の背景と目的

本研究の背景として、全国の観光地における意識の

平成 18 年 12 月 14 日受理

* 生産科学研究科 (Graduate School of Science and Technology)

変化がある。長崎市にかぎらず、全国の観光地で、集客数の低下に伴う経済的損失が深刻化している。すなわち、観光地は、集客力のある新たなセールスポイントを獲得、ないし創成する必要に迫られているのである。その新たなセールスポイントとして、バリアフリーを考える観光地が増えつつある。その理由は、主として次の2点に集約されるであろう。

第1点は、高齢化率の急伸である。平成17年の国勢調査では、65歳以上の人口比率が21%に達し、世界の超高齢社会へと至った¹⁾。すなわち、今後は高齢の観光客が増えていく、と見ての対策である。高齢者に快適さと満足を提供することによって、滞在時間を延ばし、訪問箇所も増やして消費行動を促したい、という経済的な要請に基づくもの、とも言えよう。

第2点は、移動上の困難を抱えていることを理由として、これまで高齢者・障害者に市場性を認めて来なかった、という反省がある。これらの人々を、新たな市場として開拓していくことに先鞭をつけたのは、岐阜県高山市のモニターツアーである²⁾。ここで得られた、高齢者・障害者からの意見・要望を行政と地域にフィードバックして、必要な改善を施し、誰にも行きやすい、誰でも楽しめる観光地への脱皮を図ろうとしたわけであるが、それが功を奏して、同市では、古い日本のノスタルジックな情緒を残しつつ、よりバリアフリーなまちが完成されつつある。

しかし、上述のような、購買力に期待して高齢者を誘致する、という動機が原点にあったとしても、バリアフリー整備への関心が高まってきたことは、長崎市などの斜面観光都市にとって、歓迎すべきことである。高齢者へ向けたバリアフリーの対策・配慮は、その多くが身体障害者にも適用できるからである。そして、それらの都市が内包する、第1章で触れたような二面性あるいは二律背反の中で、より多くの人々、特に高齢者・身体障害者にも旅を楽しんでもらうためには、いかなる配慮・対策が必要か、を検証することも可能である。

また、広島県尾道市を対象として選定したのは、長崎市と同様の斜面地であり、観光都市でもあったからである。そして、同市の持つノスタルジックな雰囲気的魅力で高齢の観光客が多数訪れる、という側面も大きな要素であった。ある意味で特異とも言える相似性を有する、尾道市のバリアフリー事情を調査し、長崎市との共通点および相違点を比較検証する中から、斜面地の観光都市における実用的で汎用性のあるバリアフリー対策を想定し、提言を行うことが本研究の目的である。なお、調査日は2006年8月26日であった。

3. 事例

本章では、尾道市の斜面に存在する観光スポットと、比較的平坦な旧市街地域に存在する観光スポット、計5箇所を対象として取り上げ、それぞれの特徴とバリアフリー事情について、個々に論じていく。車いす利用者の視点から検証しているが、そこでの発見と問題意識は高齢者にも有用なものとなるはずである。

3.1 JR尾道駅

このJR尾道駅は、いうまでもなく尾道観光の出発点であり、尾道市の顔と言っても過言ではない。しかし、この駅には、改札口とホームの間にエレベーターが設置されておらず、車いす用の階段昇降機も用意されていない。車いすを利用する乗客がいた場合には、駅員などが人力で車いすを抱えて、改札口とホームを往復する、とのことである(Photo.1, Photo.2 参照)。

尾道観光の玄関口において、このような状態が残存していることは意外であったが、駅員の話によると、JR尾道駅は整備途上であり、平成19年度中にはエレベーターも設置される予定とのことである。



Photo.1 JR尾道駅のホーム(EVなどはない)



Photo.2 車いすを抱えてホーム階段を降ろす

3.2 尾道市営バス

尾道市交通局の話では、平成11年にノンステップバス1台を導入したのを皮切りに、以後順次増強して、現在では6台のノンステップバス、2台のワンステップバスを所有し、病院等のある路線で運行しているとのことであるが、JR尾道駅～千光寺公園の路線では、1日1便しか運行していない(Photo.3参照)。

このバスは、車体から引き出した鉄板を路上に降ろしてスロープとし、運転手が車いすを押し上げるものである(Photo.4参照)が、タイヤの空気を抜いてバスの車高そのものを下げる、ニールダウン方式は採用していないようである。また、尾道市交通局によると、このような車高無調整タイプが4台、車高調整タイプが4台、という内訳になっている、とのことである。

5分ほど走行すると、市街地を離れて登坂路が始まる。数分後には傾斜がきつくなり、やがて終点の千光寺公園へ到着する。ここから少し坂を下ると、山頂と麓を結ぶロープウェイがあるのだが、途中で階段があるとのこと、車いすでは検証できず、断念せざるをえなかった。



Photo.3 ノンステップバス前景

3.3 千光寺公園から「文学のこみち」

千光寺公園は、千光寺山(標高136.9m)の山頂にあり、ここから尾根伝いに麓へ降りていく道には、尾道市立美術館や千光寺など、いくつかの観光スポットが点在しており、それらを図示する案内板が設置されている(Photo.5参照)。また、起伏の激しい地形は、たくまらずして、尾道の市街地を俯瞰する、自然の展望台ともなっている。山頂には観光案内所があり、付近の観光スポットについてのパンフレットや散策用の地図などを配布している。観光客の体力や持ち時間などに合わせたコースの相談にも乗っているようである。

千光寺公園から市立美術館へ行く散策路には、「文学のこみち」という名称がつけられている。しかし、その優雅な名称とは裏腹に、かなり急な登り坂であり、車いすの利用者が独力で登るのはほぼ困難と言ってよいであろう。また、路面がピンコロで舗装されている(Photo.6参照)ため、車いすにはかなり強い振動が伝わる。車いすのみならず、杖を使用する障害者や高齢者にとっても、身体にかかる負担は大きいものと思われる。



Photo.5 千光寺公園山頂付近



Photo.4 ノンステップバス乗降の様様



Photo.6 文学のこみち

3.4 尾道市立美術館

凹凸の激しい、急坂の「文学のこみち」を登り切ると、こんもりとした緑の中に、現代的でシャープなたたずまいの中にも、瀟洒な雰囲気をもった尾道市立美術館が見えてくる。外観は総ガラス張りであるが、清涼感にあふれている。建物の中は、外界の暑さと喧騒から遮断された、静謐な空間が広がり、急な坂道を登り終えた疲労感が安堵感に変わる。しかし、ここの2階にあるロビーからは、展望台のように風景を楽しむことができる、という触れ込みであるにもかかわらず、実際に行ってみると、窓の外にある塀に遮られて、車いすの視線の高さからはほとんど、と言ってもよいくらいに見えない(Photo.7参照)。同様の風景を健常者の視点から見た写真(Photo.8参照)と比べてみると、その違いがよく分かる。さらに、外のテラスへの出口には段差があるため、車いす使用者は室内からガラス越しに眺めるしかないのだが、車いすは膝が当たるところまでしか寄ることができないため、健常者に比べると目の位置が遠くなる。したがって、見える範囲はより狭くなってしまふ。



Photo.7 車いすの視点から見た風景



Photo.8 健常者の視点から見た風景

3.5 尾道市立美術館～千光寺への坂道

尾道市立美術館から千光寺へ、尾根伝いに下っていく道は傾斜が非常にきつく(Photo.9参照)、これだけの急勾配で、しかも曲がりくねった狭い道を、車いすが独力で下りることは不可能である。介助者も、車いすを支えながら後ろ向きで下りることになり、かなりの体力と集中力を要求される。バランスを崩したり、足を滑らせたりすると、車いすの当人も、介助者も危険である。2人以上の介助者をつけたいところである。

大相撲の横綱・大関の手形を刻んだ石碑や、ポンポン岩などの奇岩が続く山あいの道を下っていくと、視界が開けて、尾道の市街地と海を見晴らせる場所があるが、車いすでは立ち止まってその景色を眺められるような、安全なスペースは用意されていない。

長い急勾配の坂を下り終えると、千光寺の門が見えてくる。神社の鳥居と見まがうような、朱塗りの柱をくぐったところに「犬を連れての入山ご遠慮下さい(但し、盲導犬・聴導犬・介助犬は除く)」と書かれている(Photo.10参照)。身体障害者補助犬法が施行された平成15年10月以降に設置されたものであろうか。



Photo.9 千光寺へ向かう急勾配の下り坂



Photo.10 千光寺の門近くにある注意書き

3.6 おのみち映画資料館

尾道市は、林 芙美子や志賀直哉などの文豪が居を構えた文学の街であると同時に、小津安二郎をはじめ多くの映画監督が、数々の名作映画のロケを行った、映画の街でもある。尾道市で撮影された劇場用映画は、わかっているだけでも20人の監督、35作品に及ぶ³⁾。それを顕彰する施設として、平成12年4月にオープンしたおのみち映画資料館(Photo.11 参照)は、小津安二郎監督の「東京物語」にも出てきた、尾道市役所前の古い倉庫を改造して造られている³⁾。

館内には、廃業した映画館から寄贈されたポスターや古い映写機などが展示されている。古い劇場の雰囲気を感じ出すミニシアターでは、短編映画も上映され、映画の街という切り口でのアピールに成功している事例かと思われる。

しかし、資料の多くが2階に展示されているのに、2階へ上るには階段しか用意されておらず、車いす利用者や歩行が不自由な障害者、高齢者にはその資料を目にする機会が保証されていない。その点は残念なことである(Photo.12 参照)。



Photo.11 おのみち映画資料館の外観



Photo.12 おのみち映画資料館内部の階段

3.7 おのみち歴史博物館

映画資料館の近くに、おのみち歴史博物館がある。大正時代に建てられた、旧尾道銀行本店の建物をそのまま使用して平成17年4月にオープンした。この建物は尾道市の重要文化財に指定されており、まさに歴史を感じさせる、重厚な雰囲気の外観である(Photo.13 参照)。古い建物であるだけに、バリアフリーの配慮などはない。玄関には階段があるため、車いす利用者は裏口の駐車場へ回り、そこに設置されているスロープを利用することになる。建物の風情を保つ上でそれ自体はやむをえないが、入り口にその旨の掲示がない。この点はいかにも不親切であり、一考を要する。また、出入り口の扉が外開きで、誰かに開けてもらわないと、車いすが入れない、という点にも改善を求めたい。

この歴史博物館の受付カウンターは高すぎて、車いす利用者には使いにくい(Photo.14 参照)。これも「旧尾道銀行本店の窓口をそのまま使用しているため」と言われて納得できたが、その説明はどこにも掲示されていない。そのため、車いす利用者には圧迫感と疎外感だけが残るのではないか。



Photo.13 おのみち歴史博物館の外観



Photo.14 おのみち歴史博物館内部のカウンター

4. 考察

本章では、尾道市の現状分析と長崎市との比較、さらには今後の展望について、考察する。

4.1 バリアフリー整備の現状

今回の調査で見ると、尾道市におけるバリアフリー整備の現状は、万全とは言い難いようである。ただ、何人かの人々から聞いた話の感触では、市当局あるいは観光関係者においてもその点は認識しているように見受けられ、模索中のところもあるので、いわば途上にある、と言えよう。しかし、一点気になったのは、どこのバリアフリー設備でも「障害を持つ人や高齢者が困らないように」という配慮から出発したようには思えなかったことである。法令で定められているガイドラインをなぞっただけの画一的な対応が多く、車いすや高齢者には使いにくい、中途半端なものに終わっている点は残念である。

4.2 長崎市との相似

一方で、尾道市も長崎市と同様のジレンマを抱えているようである。すなわち、3.7 おのみち歴史博物館でも経験したように、古い建物や施設、あるいは街並みにおいては、その古いたずまいこそがチャームポイントなのであり、バリアフリーとは対極に位置してしまうことも多い。そのジレンマの解決策、妥協点として、裏口など目立たないところにスロープなどを設置する、あるいは少し離れた場所にエレベーターを備えた高齢者・障害者専用の出入り口を設ける、という方法をとっている。しかし、この方法は合理的である反面、別ルートへ誘導される高齢者・障害者には疎外感を与えることも知っておかなければならない。

4.3 今後の展望

今回見た場所にかぎって言えば、ベンチなどの休憩設備が非常に少ない、という印象を受けた。また、案内板やサインの数が少ないこと、見やすさ、分かりやすさへの配慮に欠けているようにも感じた。高齢者も障害者も、体力的な問題から休憩設備の充実を求めているし、見やすく分かりやすい案内板への要望にも切実なものがある。この点について、高齢者に配慮した観光のあり方を研究している77歳の西村美枝子は、著書の中で「高齢者であれば、広い歩道、安全な横断歩道、大きく見やすい案内板、休憩所などが欲しい」と述べている⁴⁾。

高齢者・障害者を観光客として呼び込みたい、との思いがバリアフリー整備の原点ならば、高齢者・障害

者が何を必要としているのかを知り、そのニーズに応える整備を行うべきであろう。

5. おわりに

観光地におけるバリアフリーとは、高齢者・障害者が利用できる、あるいは楽しめるようにする、という認識は間違いではない。しかし、方法論においてベクトルが変わってくるようである。たとえば、4.2 長崎市との相似で述べたような、車いす用のスロープやエレベーターを別の場所に設置する方式はどこでも見られる。しかし、これは高齢者・障害者を分離する「一時しのぎ」でしかない。一級建築士で、自らも車いすを使用する川内美彦は、この例のように、特別な手段でバリアを解決しようとする方法を「バリアの再生産」と呼び、問題の本質的な解決にはつながらない⁵⁾、と指摘している。

これまでの論点をまとめると、高齢者・障害者に配慮した、バリアフリーの観光地と呼べる条件とは、以下の5つに集約されると考えられる。

サインや案内板のコンセプトが統一され、直感的でわかりやすい

公共交通機関が充実していて、利用しやすい

休憩できる設備が、適切な間隔で用意されている

観光スポットへのアクセシビリティが確保され、かつその情報が入手しやすい

行政のみならず、地域住民もニーズを持った観光客に対するホスピタリティを持つ

むろん、エレベーターやスロープの設置を否定するものではないが、上記のような認識を踏まえた上での方法論として、検討されるべきものであろう。

参考文献

- 1) 総務省統計局：平成17年国勢調査抽出速報集計結果の概要 I 進行する少子・高齢化
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/sokuhou/01.htm>
- 2) 山本 誠：モニターが創ったバリアフリーのまち 高山市まちづくりレポート、ぎょうせい、2003
- 3) 尾道完全ガイド：歩いて見たい、おのみち映画資料館
<http://onomichi.take9.net/pc/index.htm>
- 4) 西村美枝子：77歳大学院生の高齢者にやさしい観光学、栄光出版社、pp.52-53、2006
- 5) 川内美彦：ユニバーサル・デザイン バリアフリーへの問いかけ、学芸出版社、pp. 29-30、1994.